練習の時は、考えられる多くのテンポを試してみましょう

藤井隆史&白水芳枝
ふじい・たかし&しらみず・よしえ
ピアノデュオ

連弾編

Q1
練習の過程で、テンポや細かいニュアンスをどのように決めていくのでしょうか？

A
「デュオの練習方法はどのようにしていますか？」ということはよく訊かれます。

ソロの場合は、まず曲の持つイメージを知るために、両手でざっと弾いてみて、それから片手ずつゆっくり何度も練習し、弾けるようになってきたら、両手で少しずつ弾き進めていきますよね。

ピアノ・デュオの場合の練習では、奏者が二人となる分、一人では解決しきれない問題も増えますが、基本的には同じような方法で進めていきます。

まず新しい曲の持つイメージを知るために、楽譜を見ながら二人で一緒に弾いてみます。このときに曲の雰囲気やテンポ、またフーガや変奏曲などのように明確にテーマがある場合は、テーマの確認を行ないます。この時に確認するテンポ

は、あくまでも楽譜に表示されたテンポ速度に沿ったものであり、たった今弾いてみた曲に対して、私たちが抱いたイメージに近いテンポであるか、技巧的にもこの速度で弾けそうかどうかなど、大まかなものです。

それから個人練習によって、目標とする速度に近づくよう、また確実に弾けるようになるよう弾き込みます。連弾の場合は、主にプリモは右手のソプラノを、セコンドは左手のバスを響かせられるよう、二人で演奏するときのバランスを想像し、音色をよく吟味しながら勉強することが重要になります。

二台ピアノの場合は、テーマやメロディーがどの声部にあるか、音楽を支える声部はどれかを確認しながら、ソロの場合よりも強弱の差を大きくして、重要な声部が明確に聞こえるように練習していきます。

各々がある程度弾けるようになったら、再度二人で合わせていきます。この時点で、楽譜から新たに発見した**rubato**や**ritardando, stringendo**など様々な速度表示や表現、またペダルの使用箇所を確認します。合わせたときに二人のイメージがぴたりと合う、などということは私達の場合はあまりなく、長い時間をかけて、それぞれが個人練習において新たに抱いた曲の印象やテンポ、音楽を揺らしたい箇所やその方法について話し合い、思いつく限りの可能なテンポやイメージを、音楽の中でいかに表現するかを試していきます。

それからは、個人練習、合わせ練習を繰り返し、あらゆる可能性を探して熟考し、試してはまた新たな発見をして、という果てしない作業になります。楽譜を読み込み、弾き込むほどに新しいアイディアと出会いますので、これでいい、と思えることはまずありません。

それが音楽の楽しさであり、室内楽の楽しさでもありますよね。

テンポに関しても同様で、楽譜に記載されている速度を忠実に守る、というよりは、弾いていく中で、考えられるテンポを試してみて、全体のテンポを考えていきますし、曲中の「間」や息づかいは、何通りもの可能性を試してみて、「何小節目のどこでどのくらい息を吸う」などという細かい取り決めもした上で、二人の息を合わせていけるように練習を重ねていきます。もちろん本番は練習どおりにはいかないものですので、片方がいつもとは違う「間」を作ってしまっても、その波に乗っていけるように、練習の過程で相手の癖や歌い方を知るというのも、本番で驚かない大きな要素になるかと思います。（白水）

Q2

セコンドが土台となり、それにプリモ

がのることでテンポが決まるように思いますが、実際の練習では、それぞれどうやってテンポを決めているのでしょうか？

A

「四手連弾ではどちらがテンポを決めるのでしょうか？」という質問をされたことがあります。

四手連弾の場合、プリモ（第一奏者。主に高音部を担当）とセコンド（第二奏者。主に低音部を担当）計二人の奏者が一つのピアノを使って一つの音楽を奏でるので、ソロの演奏とは違い、様々な音楽の要素を二人で分けていく作業が必要になります。

セコンドを演奏する上での主な役割は、ペダルと音楽全体の支え、私はそれを「バス（特に左手）の重要性」と考えますが、「テンポを決める」と言うよりも、セコンド奏者は音楽全体を見通し、プリモを大きな気持ちで支え、速くなってしまった場合に、セコンドがバスによってテンポを食い止める、と言えると思います。

プリモは、四手連弾という演奏形態から考えて、ソプラノ声部を担うことになります。したがってプリモ奏者は、音楽の中心である「歌」を、四手連弾の特徴である華やかなテクニックと共に表現することが大きな役割だと思われますので、セコンド奏者は、プリモ奏者のアイディアや欲求を充分理解し、寄り添う必要があります。

私は、四手連弾の演奏形態の特徴や作品が求める音色、作品の歴史的背景から考え、セコンドを演奏することが多いのですが、プリモを演奏する際でも、セコンドの動きを感じ、特にバスの音を支えとして、自分の音と一体となっているか、ということに注意を払います。また音楽が置かれている状況や演奏中の自分の精神状態を、セコンドを支えに考えるよう心がけています。

四手連弾の題材としてよく扱われている舞曲などでは、舞曲のリズムの性格を決定づけるセコンドの役割が重要ですので、セコンドの自覚と、プリモ奏者もそれを意識する必要があります。四手連弾の重要なレパートリーであるモーツァルト、シューベルトでも、セコンドの正確なテンポの刻みが感じられる演奏には、作品全体に落ち着きと統一感が存在すると感じています。

四手連弾では、個性も、育った家庭環境も違う（血縁関係がない場合）二人が一つの音楽を奏でるのですから、演奏の基本となるテンポ設定に食い違いが出ても、当然だと考えています。

また、四手連弾は自分一人の音楽ではありませんので、相手の意見が非常に重

要です。自分ではこのテンポだ、と固く信じていたにも関わらず、二人で弾いてみるとあまりしっくり来ない、相手のテンポ設定の方が断然良いということもよくあります（それでも分からない場合には、録音して聴いてみるとよく分かることもあります）。

学び合い、時には譲歩する、ということも四手連弾＝室内楽を学ぶ要素ですし、新しいテンポ感を学ぶ機会と捉え、同時にご自身の人間性を広げる絶好の機会と考えても良いでしょう！（藤井）

ソロ編

Q1

最初の譜読みの段階から、最終的なテンポを考えていくものなのでしょうか？

A

譜読み時の、まだ音楽がまっさらな状態では、どんなことに気を付けてテンポを考えたら良いのでしょうか。

作品にタイトルがついている場合は、イメージを持ち、眼から（楽譜から）耳から（実際に鳴っている音から）その作品を感じ、作曲家の人生や作品群の傾向と重ね合わせて、その曲名の由来とテンポ表示（♩＝60など）を知ることも重要です。

また、記載されている速度記号（Allegroなど）を、単に「速く」「遅く」と捉えるだけではなく、語源の意味も辞書などで知る必要があります。

そして、その速度記号とテンポ表示で、実際に身体を動かしてみてはいかがでしょうか？　テンポという音楽の鼓動、脈拍を、今奏でようとする音楽でご自身が感じてみるのです。

時には作曲家の特徴、楽譜出版社によって、速度記号、テンポ表示をどこまで信用できるか、という問題が生じることもありますが、迷ったときには、私は先生方などに助言を求め、自分自身でも調べるようにしています。

私は基本的に、何でも時間をかけるのが好きで、譜読みや練習ではあれやこれや確認しながら、ゆっくり練習するタイプです。最近では、学生の頃に比べて一つの作品に長い時間をかけることが許されなくなってきたので、譜読みを終えた後すぐ、作曲家（または校訂者）が指定している速度記号、テンポ表示に従い、メトロノームを使っての練習を始めます。

ゆっくりの練習ばかりでは、意外と自分の都合に合わせた演奏になりがちで、ペダルのことや指使い、音楽的表現に至るまであれこれ悩みますが、テンポを強制的にでも上げることにより、総合的に音楽を早くまとめられる、と感じています。

「どう頑張っても指定されたテンポでは演奏できない！」ということがあるかもしれませんが、そのテンポに合わせた指使いや呼吸、フレーズの扱い、ペダル等に慣れることで、解決できる場合もあるように思います。

演奏が最終的な段階へ進むと、テンポ一つで演奏ががらりと変わったり、突然弾き易くなったりすることを皆さんもご経験済みだと思いますので、「テンポが演奏を決定づける」と言っても過言ではありません。

ただ、音楽には「絶対にこれ！」とい

うものはありませんので、練習時にはゆっくりのテンポから、想定よりも速いテンポまで、多くのことを試されることをお勧めします。

仕上げの段階では、ゆっくり弾くことにより確実性が生まれ、忘れかけていたフレーズや新しい歌が発見できますし、まだ初期の段階では速く弾いてみることで指が訓練され、フレーズを大きく捉える練習につながるはずです。

今回は、練習時のテンポ設定について書かせていただきましたが、演奏とは演奏者が長い時間をかけ試行錯誤を重ねた、一個人から発せられる心のメッセージです。楽譜に表示されていることだけにとらわれず、演奏者の個性や音楽観に応じたテンポ設定での演奏で、その演奏者の「顔」が見えてくるのもよいのでは、と思います。（藤井）

Q2

練習の過程で、不安定なテンポの揺れをどのように修正していったらいいのでしょうか？

A

自分にとって刻みやすいテンポ（速さ）とは、メトロノームに合わせるとどれくらいの速度になるのだろう、と日頃から意識して考えるようにしています。私は時計の秒針と同じ「60」を目安に、いつでもこの速度を刻めるよう、時間のあるときには時計とにらめっこしたり、初めて開いた楽譜を見て冒頭に表示されたテンポを刻むときは、この「60」を基準に、それよりもどのくらい速いのか遅いのかを考えたりしています。

曲中のどのような場面でも、いつでも刻める「同じ」テンポを自分の中に持っていることができれば、曲の途中でテンポがどんどん速くなってしまったり、ルバートをし過ぎるなど速度が不安定になったりすることも軽減され、定められたテ

ふじい・たかし＆しらみず・よしえ：共に東京藝術大学音楽学部器楽科を卒業後、それぞれ文化庁、野村国際文化財団の奨学金を受け、ドイツ国立マンハイム音楽大学大学院に学び、同コンツェルトエグザーメン課程を修了。2004年ドイツ国家演奏家資格を取得する。各々ソリストとして、数多くの国際コンクールでの入賞、ソロ・リサイタルやオーケストラとの共演、放送出演など、ヨーロッパ及び日本各地で活動を行なう。

2004年4月にピアノデュオ（2台ピアノ及び1台4手）を結成し、同年10月よりDAAD奨学生として引き続き同大学院ピアノデュオ科においてR.ベンツ、P.ダン両氏のもと研鑽を積む。2006年7月に最優秀で修了、同年10月に帰国する。

2004年以降、ロンドン、C.トーニ、各国際コンクール及び現代音楽演奏コンクール“競楽VII”第2位、シューベルト国際コンクール第3位。また、マレイ・ドラノフ国際コンクール、ヨーロッパ室内楽コンクール・カールスルーエにおいても入賞を果たす。2006年度青山財団バロックザール賞受賞。

2005年よりヨーロッパ及び日本各地でデュオ・リサイタル、オーケストラとの共演など演奏活動を活発に行なっている。帰国後、東京、大阪、神戸、札幌、名古屋他各地でのピアノデュオ・リサイタル、NHK-BS「ぴあのピア」及びNHK-FM「名曲リサイタル」出演、講座など活動の幅を拡げ、デュオ・ピアニストとしても今後の活躍が期待されている。（株）ミリオンコンサート協会所属。

公式ウェブサイトwww.yoshie-takashi.com

● 〈ピアノソロ＆デュオ リサイタル〉
「シューマン“天使の主題”をめぐるピアノの夜」
曲目：シューマン／変奏曲 遺作（天使の主題による変奏曲）［藤井］、神本真理／2台のピアノのための委嘱作品、西村 朗／星の鏡［白水］、ブラームス／ロベルト・シューマンの主題による変奏曲 Op.23 他
1月25日（金）19時
トーキョーワンダーサイト本郷
問合せ、申込：トーキョーワンダーサイト本郷TEL.03-5689-5331

● 〈ピアノデュオ　レクチャーコンサート〉
「対話するピアノデュオ」アンサンブル力を磨く
曲目：ブラームス／ロベルト・シューマンの主題による変奏曲 Op.23、ガーシュウィン＝ボスナック／「ソング・ブック」より、ラヴェル／ラ・ヴァルス 他
2月14日（木）10時30分
ヤマハ神戸店　3Fサロン
問合せ：ヤマハ神戸店TEL.078-391-7654

※詳細はエーデルワイス参照。

テンポをめぐるQ&A

テンポで悩むあなたに解決のヒントを……

ンポの中で自由に音楽を表現することが可能になります。

またこの練習は、本番直前に曲の冒頭を頭の中で思い浮かべる際にも役立ちます。緊張のため、心拍数は最高潮に上がっていますので、思い浮かべるテンポは普段より既にとても速くなっているのです！　一度深呼吸して「いつものテンポ」を思い出すという作業は、高ぶった心を平常心に戻してもくれます。今ではメトロノームも小さくなり、消音機能もついていますから、必要であればいつでも（舞台袖までも）メトロノームを持ち歩くこともできますが、やはり、いざ！という時に頼りになるのは、自分自身だと思います。

八分音符や十六分音符など、細かい音符が続くパッセージではテンポが速くなり、四分音符や二分音符など、よく歌いたいメロディーの部分では遅くなる、という現象は、誰にでも経験のあることかと思います。このような箇所は、鍵盤上で練習するだけでなく、その部分だけを取り出して、口に出して歌ってみる練習も効果的です。一定のテンポを保ちながら、その中でどのように歌いたいかを吟味するには、メトロノームに合わせながら実際に歌ってみると、テンポの不自然な揺れに気付くこともありますし、息継ぎをすることによって、ルバートの仕方など新しい発見をすることも多々あります。

また、弾き飛ばしてしまいがちな場所は、テンポに合わせてドレミで言ってみると早口言葉のようになり、案外すらすらと言えないものです。口で言える速さが、今自分の弾けるテンポだと自覚し、理想のテンポで楽に歌えるようになるまで訓練した後、鍵盤に向かって弾いてみると、すべての音に意識が届くようになり、非常に弾きやすくなります。

自分の演奏を録音し、繰り返し聴きながら勉強することも、演奏を客観的に聴くことができ、自らの欠点を理解することのできる方法の一つです。自分では納得して演奏していた部分も、聴いてみるとイメージとかけ離れた演奏をしていたり、思いがけない場所でルバートをかけたり、テンポが不安定になったりしているのに気付くことができます。（白水）